



揚風

ときわ会新潟南支部
第52号
令和7年3月12日



自分を生きるって難しい

副支部長 瀧澤 訓

(大通小・63年度)

母が美容師をしていたためでしょうか、私は2歳の時から幼稚園に預けられました。迎えるバスに乗るのが嫌だと大泣きし、園に着いてからも歌やお遊戯を拒んで、近所のお兄ちゃんがいる別の学年の教室に紛れ込んでいました。

以来、大学卒業までの20年間、私は教育を受ける立場にいました。「何時間目は何の教科だ」とか「休み時間は何分間だ」とか「今日の給食は何だ」とか、すべてを誰かに決められ、それに従う生活に何となくストレスを感じていました。

そんな私がどういう訳か教師という道を選び、大学卒業から今年で37年間教師を続けてきました。教師になってからも他人に決められる生活は続き、「今度の赴任先は〇〇小学校だ」とか「研究授業はあなたがや

りなさい」とか「いつまでに何を提出せよ」とか。まあ、こういうことは教師に限った話ではないでしょうが。還暦を間近に控えた今、改めて振り返ると、「私は自分の人生を歩んできたのだろうか」という疑問が湧くのです。

ただし、教師という職業は案外自分の裁量で決められる部分も多いのは幸いでした。「1時間目は算数だ」と決まっても、その1時間をどのように展開するかは私が決めることができました。目の前の〇〇さんにどのような言葉を投げ掛けようか、何を大事にして学級経営をしていこうか、そういうこともみんな自分で決めることができました。そういう意味では「私も自分だけの教職人生を歩んできた」と言えるのでしょうか。

今、これからの教育を背負って立つ皆さんにお伝えしたいことは、この「自分で決める」ということを大切に、目の前の子どもたちのために一番よいと思うことを、自分や家族を犠牲にしない程度の力加減で実践していただけたらと思います。

私は教職を終えた後の残りの人生を、より自分らしく生きるためにもうしばらく悩むことにします。